

昨年の夏休み、私に初めてのいところできた。叔父夫婦のところにやってきた女の子、Mちゃんだ。もうすぐ二歳になるMちゃんは、歩くのが速く、ダンスが上手で、活発な子だ。私にとって付き合うのは本当に疲れるが、とてもかわいい、大切な存在だ。

Mちゃんは生まれてから十か月間、乳児院というところで育てられた。Mちゃんを産んでくれたお母さんは、事情があってMちゃんを自分の手で育てることができず、Mちゃんの幸せを思って、他の人に育ててもらう道を選んだ。乳児院では、担当の保育士さんが、Mちゃんのために愛情をかけて、おむつやミルク、お風呂などの世話をしてくれた。そのおかげでMちゃんはすくすくと成長していった。一方、叔父夫婦は、誕生と同時に赤ちゃんを亡くすという辛い経験を二回しながらも、また自分たちのもとに赤ちゃんが来てくれることを願い続けた。そんな三人は、昨夏、児童相談所というところを通して奇跡的に出会い、親子となった。「仏様のおかげ。」「亡くなった赤ちゃんたちが導いてくれたご縁。」祖父母は幸せそうな三人の姿を見て、口をそろえて言う。私も、この出会いは運命だと思う。だから「もし税金がなかったら、私たちはMちゃんに出会えなかったかも。」と母が言い出したときは「え、どういうこと？」と思ってしまった。

こども家庭庁のホームページによると、日本には「社会的養護」という仕組みがあり、そこには多くの税金が使われている。社会的養護とは、保護者のいない子どもや保護者に育ててもらうことが難しい子どもを社会の責任で保護して育てることだ。乳児院や児童養護施設などの施設の整備、そこで働く職員さんへのお給料、家庭的な環境で養育をする里親さんたち、の支援も税金でまかなわれている。他にも、児童相談所という所では、困っている親の悩みを聴いたり、その後、親子にどうしてあげたらよいかを考えたりしている。これも税金で運営されている公的機関だ。

もし、この社会に乳児院や児童相談所がなかったら、Mちゃんはどうなっていたんだろう。十分にミルクをもらえなかったかもしれない。オムツもかえてもらえなかったかもしれない。一人ぼっちで寂しい思いをしていたかもしれない。何より、私は、Mちゃんに出会えていないだろう。そう思うと、社会的養護という仕組みを支えてくれている税金に対して、感謝の気持ちでいっぱいになる。

学校や公園、図書館、道路など目に見えるものだけではなく、困っている人に寄り添い、笑顔や安心をもたらすという、目に見えにくい仕事にも税金は使われているのだ。税金は、これからも人々を助け、幸せにするためのものであってほしい。そして、私もそんな社会の一員として、税を納める大人になっていきたいと思う。